【雑想】チャングム（8）　王様の病・張仲景

斉観堂鍼灸・気功治療院　鈴木斉観

『宮廷女官チャングムの誓い』、ハン・サングンとチャングムが宮廷から追い出された硫黄アヒル事件と同じ様に王様が病に伏せ、今度はクミョンやチェ・サングンが疑われるところ。今までニコニコしているだけで大した力がないと思えた長官がそうではなく、チャングムの味方をする。ちなみに長官など内侍府（ねしぶ）の役人は髭がないが、それは宦官（去勢した男性）であるからだ。

王様は医局長に傷寒症との診断で治療を受けていたが、なかなか良くならなかった。王様はよく同じ様に体調を崩していた。硫黄アヒル事件では、硫黄の入った水を飲んで育ったアヒルの肉を食べた夜に倒れ、その為にアヒルが疑われた。しかし他の人が食べても問題はなく、傷寒症との診断は誤診だとチャングムは疑うわけである。

傷寒症とは外感熱病、つまり外邪（外部の病因）を受けてなる熱病の総称で、いわゆるカゼやインフルエンザなどである。

医局長も傷寒症という診断に疑問を持っており、調べていて、『金匱要略』に載っている孤惑病にたどり着く。そして、傷寒証の繰り返しによる後遺症であり、肝腎陰虚による狐惑病と診断した。

一方、チャングムは危険を顧みず、王様の病状日誌を読み、王様が腫れやすい体質であることに気が付く。そして、ヒ素が混じった温泉水を飲んで育っている牛の乳を、長年、王様は飲んでいたことをつきとめた。病名は同じ孤惑病だが、ヒ素中毒による肝経湿熱が引き起こしたとした。

チャングムの診断が正しかったわけだが、要するに、こう想像できる。ヒ素中毒により、肝臓や腸付近に血毒が生じた。血毒は熱を帯び、慢性的な炎症となっていたのだろう。それらの毒から発せられる邪気の為に皮膚は腫れやすく、また免疫力が落ちている為に、傷寒症にもよくなった。

ところでここで出て来た『傷寒論』も『金匱要略』も後漢の張仲景が書いた。『傷寒論』のことをシン医務官は傷寒症を調べていたチャングムに、「大部分の医書はその本からの引用だ」と説明している。『金匱要略』は傷寒症以外の様々な疾患について書かれたものである。

『傷寒論』は『黄帝内経』と並ぶ中国系東洋医学の古典中の古典である。『傷寒論』は傷寒症を例に、その時系列的変化を整理し、その変化した病態とそれに応じた薬方が記述している。そこに記載されている薬方の数は百余りであり、薬方を構成している薬味（生薬）も多くて６・７種であって極めて簡潔である。ところが後の時代になると、「理論が理論を生み、枝葉には枝葉を加えて、まったく複雑怪奇なものに」（『漢方問答』）なった。唐の初めにできた『千金方』では、千以上の薬方があり、多いものでは25種ぐらいの薬味が用いられている。

江戸中期、まだそうした「複雑怪奇」な医学が盛んな時代に、日本が誇るべき漢方医・吉益東洞は当時のそうした観念的な医学を否定し、『傷寒論』に基づく実効的な古方漢方を完成し、世間に唱道した。

一般的には『傷寒論』は漢方医が学ぶものと思われている。それを鍼灸師である私が学ぶのは、そこに邪気や毒（気滞・血毒・水毒）の状態と様々な病態との関係が描かれているからである。（2008年４月）

参考：『韓国ドラマ・ガイド　宮廷女官チャングムの誓い』（日本放送出版協会）、荒木正胤『漢方問答』